日本政治思想史研究

丸山眞男著
東京大學出版會　1952

所蔵館	請求記号
本　　館：	/311/Ma59
神田分館：	/311/Ma59

［著者プロフィール］
丸山眞男（まるやま　まさお）
［1914～1996］
政治思想史学者
マックス・ヴェーバーの影響を強く受けた学者の一人
日本型ファシズムと天皇制国家などを論じ第二次大戦後の民主主義思想を主導

前川　亨　（法学部教授）

ジャンクフードには真似できない旨味が詰まっている。でもその味は良く噛まないと分からない。そういうスルメのような本としては、古典或いは古典的名著が最も相応しい。私は丸山眞男『日本政治思想史研究』を挙げたい。この本には、私は個人的な思い出がある。

大学３年生の夏休み直前の或る日、私は休暇中に江戸時代の思想史に関する研究書を一冊読もうと思って、「何か面白い書物はありましょうか」と先生に尋ねた。先生はしばし考えた後、「自分はこの学説に必ずしも賛成ではないのだが――」と前置きしたうえで、「一冊ということだと、丸山眞男『日本政治思想史研究』だろうね。難解と言われているが、朱子学を勉強してから読むと分かり易い。まるで小説でも読むように読むことができる」と言われた。私は政治学者丸山眞男の高名を知ってはいたが、それまでは食指が動かず敬遠していた。しかし夏休みにはこれを読むことに決めた。

どこの大学図書館もそうだったと思うが、当時私の通っていた大学の図書館には冷房が入らなかった。その暑い図書館で、翌日から『日本政治思想史研究』を読み始めた。すると、読むのを止められなくなった。先生が言われた通り、スリリングな小説を読んでいるような感じだった。思想史がこんなにも面白い分野だったとは。抽象的な「理」だの「気」だのという議論が、実は生々しい社会的現実と密接に関連していることが解き明かされていく。個々の人間を超える何らかの力が歴史を突き動かしているようだ。そして逆説につぐ逆説の連続。これこそ弁証法（理性の狡知）ではないか。時折、背筋がゾクゾクした。朝から晩まで読み耽り、３日で読破（！）した。

本書の学説については、後に著者自身も自己批判をしているし、戦後の東アジア（「日本」に限らず）の思想史研究は本書を乗り越えようとして展開してきたと言ってよい。それにも関わらず、今日でも読み返すと新しい発見があるのは、これが「近代とは何か」という大問題と真正面から格闘した、スルメのような古典的名著だからである。

本書との出会いは私にとって稀有な経験だった。今でもこの本を手に取る度に、若き日の暑い大学図書館を私は思い出す。